

パネルディスカッション

【大阪会場】



写真 14 パネルディスカッション大阪会場

コーディネーター

佐藤 信（さとう まこと）

東京大学大学院人文社会科学系研究科教授。

パネラー

酒寄 雅志（さかより まさし）

國學院大學栃木短期大学 日本文化学科教授。

出宮 徳尚（でみや とくひさ）

就実大学人文科学部非常勤講師。

向井 一雄（むかい かずお）

古代山城研究会代表。

佐藤…本日、コーディネートを務めさせていただきます東京大学の佐藤信です。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、三人の先生方から大変広範な興味深いお話、鞠智城を素材にしている研究ができるということとを改めて感じることのできる豊富なお話をうかがいました。これから先生方にもう少し鞠智城に切り込んだ話をしたいと思っています。

今日は、最初の矢野さんの最新の発掘調査成果の話の後、酒寄さんからは、東アジアの歴史の動向を踏まえた形での、鞠智城の歴史的背景についてのお話がありました。出宮さんからは、今まで鞠智城を考える時には大野城・基肆城が百済から亡命してきた將軍の指導のもとで建てられたという『日本書紀』の記事をもとに、百済の山城との関係はぜひぶん考えられてきたのですが、むしろ高句麗の城、あるいは唐の城との関係があるのではないか、というお話がございました。また、これは鞠智城とも関係する大宰府の評価について、都督府というのは、むしろ唐の側の出先機関が北九州に置かれていたのではという、驚くべきお話もあったわけですね。それから向井さんからは、韓国における今日の山城の調査成果という広範なお話を、手短かに話していただきましたが、あれだけ多くの城を全部ご覧になっていると思うと、すごいご研究をなさっているなと思いました。

私たちが鞠智城と比較しようとしてきた百済の城の実像が、韓国における古代山城の調査研究の中で、元々の百済の城の姿が、今ひとつまだはつきりしないというか、よう



佐藤

写真 15 佐藤信氏

やく明らかにになってきた段階だということだと思えます。ですから、鞠智城を東アジアの城と比較するといふ時の、いろいろな新しい視点が、本日出てきたと思えます。そういったお話をどうまとめるか大変だと思えますが、今日は、三つの柱に沿って、三人の先生方にお話をしていたきたいと思います。

一番目の柱は、東アジアと鞠智城というテーマで、高句麗・百済・新羅それから唐の古代城郭との比較の中でどう見るかです。あるいはその高句麗・百済・新羅の城もそれぞれという特徴があるかという点について、今日お話があったわけです。最終的に新羅が半島を統一した後、高句麗・百済の城には様々な手が加わっているというお話もありまして、それらをどう見るかということがあると思えます。また、酒寄さんのお話のような広範な東アジアの歴史動向の中でどう捉えるかということもあります。まず、東アジアと鞠智城というテーマで最初にお話をしたいです。

それから二番目には、山城の技術です。今日の副題は「古代山城の成立と鞠智城、築城技術の源流」ということでして、鞠智城の築城技術を、今日のお話にあったような韓国・中国における考古学的な知見の中で、版築の仕方あるいは城壁の石の積み方だとか、その城壁の外側にそれをプロテクトするためのいろいろな施設などから見る、馬面や出城のようなものがあるのか。あるいはその馬面を造る時に、弓矢の及ぶ範囲は短い^どが、弩という最新兵器を使うともう少し遠くまで矢が飛ぶので、馬面と馬面の距離が広いというお話が Ausgangspunkt 宮さんのお話の中にありました。そういった鞠智城の築城技術と朝鮮半島、中国の技術との関係は如何か。あるいは鞠智城にも今日のお話にあった貯木場、あるいは八角形の建物がありますので、そういったものの源流はどうかというお話を二番目にしていただきます。築城技術の問題です。

三番目には、鞠智城の成立の背景ということです。これまでのシンポジウムでも話題になってきたのですが、今日の新しいお話を踏まえた上で、改めて鞠智城の性格について、対東アジアの関係なのか、対日本人の関係なのか、律令国家との関係なのか。あるいは今日のお話では、唐との関係、フォーメーションがあるのではないか、というお話もありましたので、そういったことを少し話し合っていたいただきたいと思います。

最初に東アジアと鞠智城ということです。続きの出宮さん、向井さんのご報告も聞かれた上で、酒寄さんもう一度お話をしていただけかもしれませんうか。

酒寄… 今、出宮さんの中国の影響、それから最後に向井さんの韓国の例を聞きましたが、私はロシアの渤海とか金の城をかなり見ていますけれども、渤海は雉城、いわゆる馬面を持たないのです。ですから、やはり東アジア全体、あるいは東北アジアまで含めて見ていくと、いろいろな造り方が、それぞれの民族によって変わってくるのだらうなと思っています。金になると城内にたくさんの方の住居址を持っていて、そして中にオンドル、いわゆる管と言っていますけれども、オンドル住居などもあつたりして、かなり大型な山城が出来あがっていきます。そういう、今それぞれの例が挙げりましたが、アジアと言っても非常にいろいろなパターンがある中で城が造られています。

日本の場合には、一般的に朝鮮式山城というふうに言われてきましたけれども、今日のお話を伺っていると、それももう少しきちんと分類していかなければいけないなということと、もうひとつ、私が先月にこの鞠智城を伺った時に最初に思ったことは、案外低いな。低いところ、城があるというイメージを

持ちました。そしてその次に感想として思ったのは東北の城柵によく似ているなという、それも秋田城や、先ほど出宮さんも多賀城の話をされましたけれども、そういう感じをすごく強く持ちました。そうすると、何か国際関係じゃないみたいに思うかもしれません、秋田城の場合はおそらく渤海などの東北地方における外交の窓口です。多賀城もまた少し違う性格があると思いますけれど、秋田城は特に日本海を渡ってくる渤海使が来ますので、そういう外交の場としてあったものと思います。そして実は東門の外側にトイレ遺構があります。木樋があつて水洗トイレなのです。覆屋がついていて、個室になっているのですが、中から日本にはない、豚食をする回虫、寄生虫卵が出ています。豚食をする民族というのはあまり日本列島の中にはほとんどないだろうと思いますが、オホーツクかあるいは大陸かということになるだろうと考えられ、そうすると、そういう特別なトイレを作るとするのは、外交的な役割を担った施設の賓客のようなものを接待する場所かなと考えられるわけです。

そうなると鞠智城をどういうふうと考えてみるか、もうひとつ大事なことはやはり、隼人、特に七世紀の末から八世紀の初頭というのは、隼人との関係が非常に深くなってきましたから、そういう隼人たちの、服属した隼人たちが儀礼する空間みたいな場として大きな役割を担わせてくるのかなと思います。そういう時に八角形のああいふ建物なども非常に驚くものですが、あれが先程出宮さんも言うておられましたが、下から見た時に、多分見えるのだろうと思います。大変驚かせるようなそういう空間、飛鳥などでも蝦夷がやってきた時の、蝦夷の饗宴する場所などもそうですが、そういう驚かせるような施設が、噴水施設なんかありますから、そういうことをちよつと深く考えたりしています。多面的な要素を持っている、もち

ろん最初は国際性豊かな、特に白村江以降の緊張関係の中でできた。そしてさらにそれが隼人とかというものと関係を深めていくとか、いろいろな要素を持ったお城が鞠智城かなということを、お二人の報告を聞きながら少し感じました。

佐藤.. どうもありがとうございます。最後にお話された鞠智城の性格については、また後でも議論したいと思いますが、時代とともに国際的な面、あるいは国内的な面、軍事的な面、あるいは食料を蓄積する面など、いろいろな性格が表に出たり隠れたりすることがありうるかと思います。今、外交の場としての東北城柵との比較をされました。秋田城や鞠智城は外交の場でもあるのではないかというお話もあり、単に軍事的な施設だけではないという指摘だったと思います。

さて、出宮さん、先程のご報告では、高句麗や唐の城との比較をしていただいたわけですが、その後の向井さんのお話も含めた上で、鞠智城を理解する時に、例えばどういう東アジアの城と比較していけばいいのかということ、それからお話にあった九州における唐の勢力が及んだ時点での築城の可能性ということ、そうした点についてもう少しお話していただけませんでしょうか。

出宮.. はい。一点目は、その鞠智城ですが、近世の城郭、戦国の城郭から言うところ、これは平山城ひらやまじょうです。それに対して一番新しい怡土城ひらつちじょうというのは、これは平山城という立地の仕方がそうになっています。特に長者原の建物群というのは、まさにその役所的な建物であります。ですからこれは前にも少し言いましたが、ひよっとするとあの一帯に内郭があるのではないかと思えます。つまり複郭式になっていて、外郭と内郭という二重になっているのではないかと思えます。つまり都城のパターンですね。都城の場合は基本的に

は四角ですが、そこは山の形に規制されていますから、形はその正確でないにしても、構成上はそういう二段構成になっているのではないかといい方をしています。それから八角塔と言っているのは見晴らしのいいところが、高句麗では、古くは「点将台」という言い方をしています。城の中心部あるいは見晴らしのいいところに多くは方形の何段積みかの台が設けてあります。その「点将台」、最近是中国の先生方はこれを「瞭望台」と言っています。つまり、見晴らし台という城の内外、特に城下を見下ろす施設のような意味合いを含めています。ですから、あの八角の塔がいわゆる宗教的な意味合いの塔なのか、あるいは、そういう近世の望楼のような、少し意味が違ふと思いますが、そういう領域を展望する施設、軍事、プラス民政的な要素を持った施設であるという可能性があります。他の八角形や九角形の建物すべてがそうだというわけではありませんが、鞠智城の場合はどうもそういう施設ではなかったかと思っています。

これはむしろ私のほうからの疑問ですが、なぜ瓦が少ないか。通例の場合、古代の寺院は平瓦、軒瓦と軒丸瓦がセットで出てきますが、あそこは軒平瓦が出ていません。それからもうひとつは、差し替え瓦が出てないという問題があるので、考古学的に言う、「造ってはみたけれど」というようなところがあったのではないか。つまり造って以降廃城になるまで、メンテナンスを常にしながら、ずっと継続したのではなくて、土器の出土量にも示されるように、消長があったのではないかという見方をしています。先程言いましたように、筑紫大宰、実は吉備にも数年あるいは十数年で廃止になりますが大宰がいたところですが、その大宰がいたところというのはこれは朝廷の一部ですから、朝廷の中心施設である大宰府を中心として、大宰府から言えば左翼、先程の怡土城は右翼というフォーメーションを持っています。

それともうひとつ、先程言い忘れましたが、日本の城は、これは「実戦配備でない」というのを言っていると思います。向井さんのご紹介にあった百済の城は実戦配備になっていますが、それに対して日本の城は「造ってはみたけれど」というところがかなりあります。その結果として実戦に供されなかったということは、良いことだったと思いますが、その実戦配備の匂いというのか要素がない。と言いますのは、今日も矢野さんにお尋ねしたのですが、あれだけ発掘をして鞠智城から武器として出てきているのは矢尻一本だけというのを聞きまして、いよいよその感はしています。

余談ですが、戦国あるいは桃山の山城、先程言いました所堅固クラスの山城を掘りますと、必ず武器が出てきますし、鉛球が出てくるなど、実戦に供すものの遺物が出てきますが、やはり今のところ日本の古代山城からは実戦に供したものがほとんど出てきていません。やはりこの古代山城の意味合いを示しているものだろうと私は考えています。

佐藤… 幸い実戦にはならなかったということではあると思いま



写真 15 パネルディスカッション大阪会場

す。東北の城柵の場合だと、結構、伊治砦麻呂こればかりの砦まろの乱で多賀城が燃やされてしまうとか、元慶の乱で秋田城が燃やされるとか、実戦の歴史があります。西日本の古代山城の場合は、そうした実戦経験はないかなという気はいたします。そういう意味からの城の構造について、半島との比較みたいなことも必要かと思えます。

朝鮮半島の場合は、切実な三国の争いの中で機能していたと思うのですが、今の出宮さんの話も踏まえて、向井さん。

今日出宮さんが言われた唐の城と比較も含めて、鞠智城を理解するために、どういう城と比較したらいいのかという点をお願いします。これまでだと、例えば八角形の建物を韓国のソウルの近くにある二聖山城の八角形の建物と比較したり、貯木場も二聖山城にあったりします。そういう比較が私の頭の中にあるのですが、どうも今日の話を伺っていると、それだけでは駄目で、もっと幅広く比較しなくてはいいのかなと思います。そういったところをお話していただけませんでしょうか。

向井…そうですね。鞠智城をどう考えるかと、これはたぶん古代山城を研究している人はみんな頭抱えていると思います。ただ前にもお話したことがあります、鞠智城跡の城域を見ていただくと、外郭ラインというのがひとつ重要だと思います。北側にずっと山が取り囲んでいまして、ここに特に人工物は造られていないです。それから南側のほうに段丘があり、ぐっと傾斜のあるところが何段も続いています、こういったところを、越えていかないと鞠智城の城内に入り込めません。ですから低いとか高いとかって比高の問題がひとつありますが、そういう意味では鞠智城の場合、その他の北部九州の、先程、出宮先生

がお話になっていた神籠石系の城、これはもう平地に面していますので、こういうのとはだいぶ選地のあり方が違う感じはしています。

それともひとつ。貯水池がはつきりとわかっているというのが鞠智城の特徴ですが、城には貯水池もしくは貯水関係の施設というのは必須です。遼東半島の隋、唐を破った高句麗の城砦群というのは、中にもものすごく広い貯水池があります。実際そこからは瓦とか土器もたくさん出てきますので生活の場になっています。

もうひとつ、鞠智城であんまり武器が出ないというお話がありますが、実は先週私も古代山城研究会で、兵制とか軍制ですね。防人制や軍団制とか、そういうことを話しました。その中で東北の方との比較で、東北の城柵は近畿大学の鈴木さんによると、武装された官衙であると。実際、千人単位の兵士が駐屯しています。それに比べると大野城もそうですし、鞠智城もそうですけれど、大量の兵士がここで住んでいたような痕跡はまったくないですし、記録もありません。だからほとんど人がいない状態です。もちろん武器も出ないと思います。だからそういう意味では、その軍事的な西日本の山城で、役所的な東北の城柵というイメージで私たち捉えていますけれど、実際中身は結構真逆なのかもしれません。そんなところではないでしょうか。

佐藤…鞠智城の選んだ地形が、低くはあるけれども、大変防衛性の高い土地であるというのはその通りだと思います。逃げの城というお話がありました。大野城も基肄城も中に大量の壮大な倉庫群があつて、その倉庫には稲の系列の収穫物が大量に貯積されているわけです。ですから攻めてきた時にはその山城の中に籠

って、高句麗の場合だと冬までもてば雪の季節がきて、唐の大軍は退いていくであろうということがあったと思います。そのために、大量の米倉を城中に築いていた。鞠智城ではそれが文献史料にも九世紀代までみえ、米倉が九世紀代に燃えたというお話があったりするわけです。また、その場合に私は米倉に米を運ぶ時は、大野城の山中の場合もあるわけですけども、山の頂上に米を運ぶというのは相当大変なことだと思っています。ただ、鞠智城の場合、九世紀にまで菊池郡の倉院という形で機能していると思われ、低い代わりに九世紀代までかなり機能しているのではないかという気がしています。

そうしたことを含めて、大野城と違う面があるのかなということが、話を伺っていて気になりました。あと武器の場合は、九世紀にやっぱり兵庫ひょうぐがあるので、兵庫ひょうぐがあったと思います。その中に鼓も納まっています、それが倉庫の中に納まっているのに、自然に鳴ったというので大騒ぎしたということだと思えます。そういう意味では武器庫はあったのですが、納められた武器というのは大事な国有財産で、その後施設の機能が終わる段階になっても、次に転用されていくと思います。だから残らない面があるのかなと思います。

鞠智城の機能を考える上では、米倉や兵庫の機能が、どう続いていくのかということが重要です。それから鞠智城の場合も、向井さんがおっしゃったように、どういった勢力でこれを守るのかということです。逃げの城でいざという時に、籠る場合があるかもしれないし、東北の城柵の場合は鎮兵と言いまして、関東地方の兵士がやってきて常駐しているわけですが、西の場合は防人がどの範囲まで駐屯したかという問題があります。それから各国には軍団があるわけですけども、軍団の兵士がどういう場所にいるか。

軍団というのは交代で軍事訓練をするという場所ですので、大量の兵士がずっと軍団にいるということもないのかと思いますが、いまひとつ古代史でもわかっておりません。考古学でも多分軍団の遺跡というのは、全然わかってないと思うのです。そのあたりは、逆に鞠智城の様子がわかれば、いろいろな実態が見えてくるのかなという気がいたします。

そういう意味で言うと、例えば生活の遺跡ですね。東北の岩手県の盛岡市に志波城という、坂上田村麻呂が鎮守府を奥州市に置いた後で、最北の地に築いた城柵があります。そこでは城柵の中に兵士たちの堅穴住居がたくさん見つかっており、生活の痕跡もあります。鞠智城では兵舎として復元されている建物があります。もう少し、例えば食事を供給した厨くわやという台所施設の跡などを発掘すれば、様々な食材のゴミや食材に付いていた木簡が捨ててあったりすると思います。残念ながら、今のところ鞠智城で発掘調査されているところは、そういう場所でないところでありまして、貯木場の水分のあるところで木製品が残っていて、そこで木簡が一点見つかるだけです。米の荷札が出土したということですが、米の荷札があったということは、私は必ず鞠智城内につめた大勢の役人たちに、給食が行われていたと思っています。そういう姿がもう少し見えてくるとありがたいと思いました。

次に、第二のテーマにいきましょう。古代山城の築城技術の源流ということで、山城の技術的な問題です。今日も石垣の城壁だとか、版築の城壁だとかのお話がありましたし、石垣の城壁の裾を頑丈にするための施設だとか、石垣の城壁を築く時に柱をどう築くかというお話もありました。また、懸門というような、少し高いところに門があつて、はしごをかけないと上れないところにわざわざ門を造って、入りに

くくしているというお話もありました。私は鞠智城の城門でも、一番南の堀切門などは、壁があつて、城門が直接表から見えないところにわざと築かれている門だと思っています。一方で鬼ノ城の山の頂上にある城門などは、低いところからでも見てくれというような、私は見せるための門ではないかと思っています。そのあたりの門の構造ですとか、城壁の構造とかでも少し比較をしたいのですが。鞠智城と他の山城の比較、あるいは中国・朝鮮の城の馬面や、雉城のお話もありましたが、そういった構造の面から鞠智城を浮き彫りにできないかという点で、まず出宮さん、そういう方向でお話をしていただけませんか。

出宮…そうですね。もうひとつは、その城を造るいわゆる工人達、その地域の農民と言うのか、居住者を動員しただけでできるかどうかという問題があります。これは今日私のほうで話す時間がなかったのですが、やはりその基本的な土木工事の場合、これは中国で言う版図、日本では版築と訳していますけれど。古い方ならご存知のいわゆる千本搦ぎせんぽんづですね。そんな技術をどういう形で賄えたか、ということになります。

これはやはり寺造りとの関係を見とかなないといけません。寺造りというのは、生前にできたかどうかには問題があります。古代のその大土木というのは、中央では宮殿造りですが、地方の本格的な恒久的な建造物というのは、氏寺になるわけです。その氏寺の基壇基礎というのは、これはご存知のように版築造成ですから、しかもその上に瓦を乗せるといふ、従来の日本にない技術体系で行われているわけです。ですからその鞠智城を含めて古代山城の周辺環境として、やはりそういう土木技術の供給に準備できる、修練をしている地域であるかどうかということもひとつの問題点として、いわゆる歴史的環境として見る必要がある

あるのではないかと思います。申し訳ありませんが、肥後の鞠智城の周辺での飛鳥寺院、もしくは白鳳の一期と呼ばれている寺院の有り様というのをつぶさに知りませんので、何とも申し上げようがありませんが、やはりそういう問題が一点あります。造る側の問題です。

それからもうひとつ、先程のちよつと補足ですが、「軍防令」という法律では、兵隊を養う備蓄で、これは一人の兵士の一ヶ月の食料が干し飯六〇穀というような規定になるわけです。ですから干し飯一ヶ月が六〇斗ですから、そういうものを備蓄するとした場合に、今見つかっている倉庫群がそういう兵士の食料庫であるのか、平たく言えば、税金を収納する施設であるのかというのは、おのずと見えてくるのではないかと思います。全部計算したことがありませんが、少なくとも今遺跡として見つかって、遺構として見つかっている大野城であるとか基肆城の倉庫群というのが、兵士が賄える食糧以上のものを備えているというのが言えると思います。

佐藤…その城造りの技術としては、版築のような土木技術が必要で、そのためには地域にそういう人材がいதாகどうかということですね。その際には七世紀代の半ばに遡るような古代寺院がこの近くに築造されていれば、そういう人たちもいたのではないかとのお話ですが、矢野さん、この鞠智城周辺の飛鳥・白鳳時代の寺院のあり方というのはいかがでしょうか。すぐそばの十蓮寺はもう少し後の時代のような気がするのですが。ちよつと離れてあったような記憶があるのですが、よろしければ説明してください。

矢野…鞠智城周辺で、古代寺院として存在しているのが、佐藤先生のお話にありましたように十蓮寺がございます。ただ十蓮寺の瓦から考えますと、七世紀にさかのぼるというよりも、八世紀の終わり頃から九世

紀にかけての寺院ということになります。あと周辺で古い寺院になりますと、玉名に立願寺という古代寺院がありますが、それがもしかしたら七世紀の末近くに建立された可能性があります。鞠智城が築城された年代で、それよりも以前のお寺というのは今のところ確認されておりません。

佐藤.. 玉名の七世紀後半にさかのぼる寺院は、菊池川を使えば、すぐのところと私は思っております。先程言った十蓮寺というのは、鞠智城が置かれた、古代の肥後国菊池郡の郡役所のすぐそばにある、郡司が営んだお寺と言われているお寺の跡です。鞠智城の山城の技術的な問題について、向井さん、続けてお願いできませんでしょうか。

向井.. そうですね。縄張りのなお話をすると、先ほどのその低い、高いという話ですが、熊本の方でしたらご存知だと思いますが、熊本にちょうど秀吉が入ってきて、肥後国衆一揆が起りますけれど、あの時何ヶ月も立てこもるのが田中城という城なのですが、結構低い城です。周りが今は住宅地になっていますが、沼だったみたいで、備中高松城みたいな感じのところだと思います。ですから得てして高いほうがいいかと言うとそういうわけでもないということになります。

同じような例かどうかわかりませんが、対隋唐戦の高句麗の戦いの中で安市城というのがありますが、安市城は実際行ってみるとたいした山ではありません。山と言えば山ですけれど、鞠智城より少し高いぐらいの山で、どうしてこの城がこんなに持ちこたえたのだろうと思える程です。これに対して、ハクガン城という、今エンシュウ城と呼んでいます、川に面した絶壁の上に城があつて、緩やかな傾斜面のほうは高い城壁があつて、先程の馬面、雉城が五つも六つも並んでいます。これは大丈夫だろうと思えますが、

ここはあつさり落ちてしまいます。すぐ落城してしまう、ですから高いが故に強いというわけでもないというのは縄張り的には言えます。

次に城門の造りの話ですが、たとえば堀切門のところ、先程佐藤先生おっしゃりましたけれども、行きますと、堀切門のところの手前のところに尾根がこう飛び出しています、そこをぐると城壁が取り巻いています。これが自然の地形を利用した雉城、馬面になっているわけです。同じように深迫門のところは、今度は谷の中ですけれども、両側が出っ張っていて、横矢をかけられるようになっていきますので、そういう意味では鞠智城の城門というのは、城門の造り方のセオリーには一通りのっているかなというふうには思います。すごく強力というわけではないですけれども。

鬼ノ城の城門についても、上っていきますと、城門に直通しないのです。尾根の出っ張ったところにいきます、そこから曲げて入らせるようになっていきます。鬼ノ城もなかなか攻略するのは、大変だったのではないかなというふうに私は思っています。

技術的な話ですが、出宮先生のおっしゃる版築のことを知っている技術屋さんがないと難しいのではないかなということについては、まったくその通りだと思います。高安城や長門城など、見つかったのではないかなという城も5世紀代ですけれども、もしかすると木柵ではなかったかなというふうに最近想像しています。高句麗の城も5世紀代ですけれども、木柵で、それから百済の城にも木柵の城があったようです、それから最近飛鳥京の周辺で、二・四メートル間隔ぐらいで、すごい木柵列が何箇所も出てきます。これで飛鳥の羅城だというような方もいらっしやいますけれども、だからもしかすると7世紀代と

というのは比較的版築の城壁よりも、そういう木柵みたいな日本式と言ったらいいいのでしょうか。そういったものが結構あったかもしれないなというふうに思っています。

佐藤..あと、今日のお話の中では、先程、出宮さんが八角形の建物について、これまでのところ鼓楼として整備されているのですが、「点将台」という軍事指揮所みたいな高い建物、中国におけるそういう城郭の施設があるけれども、そういった指揮展望所と言うのでしょうか、そういう性格の可能性を指摘されました。このほか、八角形の建物については、宗教・祭祀的な性格もあるのではないかという意見もあるのですが、向井さんはその辺はどうお考えでしょうか。

向井..山城と宗教という点では、三月の鬼ノ城の報告会の際にもやはり、日本最古ではないかといわれる瓦塔が出ていまして、それも朝鮮半島の方に系譜をもっているような、瓦の一枚一枚を作って、柱も綺麗に作っている様な、かなり細かい瓦塔が出ています。そういう意味では、鬼ノ城の中にはこのような塔の跡のような、もしくは宗教的なものを匂わせるような建物は今のところまだ出ていませんけれど、中で宗教的な行事が行われていた可能性は高そうです。

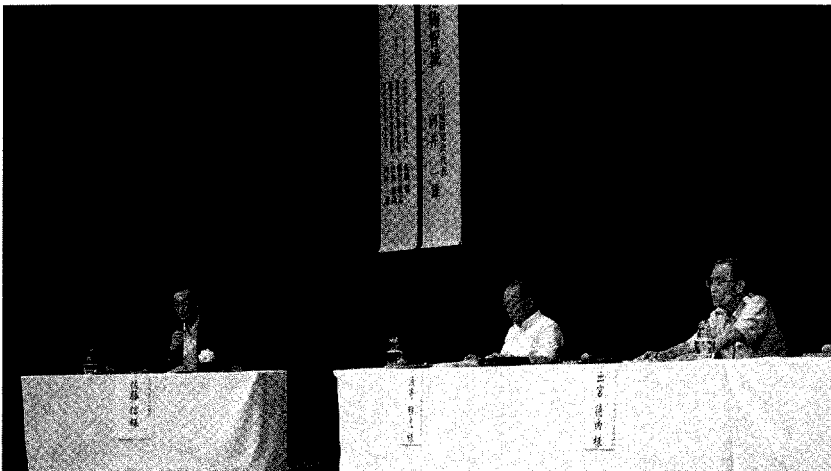
それから、鞠智城の八角形の建物ですが、那須官衙遺跡なすかんがいせきや、関東地方の官衙遺跡、郡衙の跡です。そこに、倉庫群に混じって六角形の建物など、多角形建物が時々混じっています。静岡の方にもたしか例があったと思うのですが、そういったものかどうか関係してくるのかなと以前から少し気にはなっています。

佐藤…群馬県の伊勢崎市の三軒屋遺跡という古代の上野国佐位

郡の郡役所の正倉院の中で、八角形の立派な倉庫の建物が見つかっています。ただし、その八角形の倉庫と鞠智城八角形の建物とではの柱の配置が全く違います。これまでですと、二聖山城だとか、あるいは、今日出宮さんの話であつた、高句麗の丸都山城にも中心部に八角形の建物が二棟あるということ、今まで比較してきたわけです。出宮さん、点将台の場合は、中国の城郭の歴史では一つの城に一つだけです。

出宮…先程も言いましたように、瞭望台といって、軍事目的を超

えた、民政的というのか、いわゆる治所、おさめる場所です。行政的な意味合いを含めて城下の領民の様子をも見届ける和戦両様というような意味合い、つまり政治的な意味合いがより色濃くあるということで、軍事施設オンリーではないものと私は想像しています。なぜ点将台が瞭望台に変わったのかということについては、むしろ軍事目的以上に治政的な意味合いを込めて、そういう名称に変わっているのだと私はそう考えています。



佐藤…わかりました。軍事的というだけでなく、行政的なものが入るということですね。

それでは、最後に、第三のテーマでそれぞれお一人ずつ、鞠智城の築城の歴史的背景について、鞠智城の性格にも関連して、東アジアとの関係、隼人との関係、律令国家との関係、あるいは今日のお話に出てきた唐との関係をどうみるか。そして、鞠智城の性格としては軍事的な施設、外交的な施設、それから行政的な施設、あるいは財政的な施設、いろいろな面が浮き彫りになってきたと思うのですが、その辺りについての話を酒寄先生からそれぞれ順番にお話いただきたいと思います。

酒寄…先程の製作技法の中で、例えば、先程の向井さんの説明になかったところで、南山新城なんざんしんじょうのお話をしま

す。慶州に南山新城という大きな山城がありますが、そこから石碑が何枚か出ていて、それは南山新城碑というのですが、城壁を造るにあたって分担をした人達の名前だとか距離だとかが記載されています。ですから、石壘をつくるのに一人の指揮官がいて全部造ってしまったというのではなくて、在地の首長達を集めて、それを分担しているのです。それは実は、私が青山学院大学と一緒に調査をしている北朝鮮と中国、ロシアの国境のクラスキノ土城という平地城があるのですが、そこもよく見てみると工法が変わるのがよく分かります。何メートルかおきに、石積み状態が変わっていきます。それをさつき見てみると、木の棒が出てくる、ああいう範囲であるいはもう少し長いのもかもしれません、よく見ていくと違いがあるので、鞠智城は特に土壘ですから、土壘の違いがどれほど分かるかということは問題ですが、アジアの場合は、在地首長どいちしゅうちょうをどうやって使っているかということがそれから分かったりします。

それから、性格的なことは先程から何回も申し上げていますように、七世紀の後半代、七世紀末〜八世

紀初頭から八世紀、九世紀とそれぞれ違う展開をしています。軍事的な性格が極めて高いのが、七世紀の第三から第四で、七世紀の末から八世紀の頭くらいになると、かなり儀礼的な空間をも兼ねてくるようになります。そして九世紀になると倉庫としての機能に変わっていくという、変遷をしているというイメージを持ってみたほうが分かり良いのかなと思います。

アジアの場合、軍事的な面でいえば、城が拠点になって、次の城を造って、領域を拡大していくということをしていきます。それも渤海などを見ると、川沿いにどんどん広がっていきます。城が拠点になって政治的な領域支配をしていく。ところが、日本の場合、割と近いところでそれぞれ平地城と山城をセツトでもっていたりしています。

それから、烽火でお互い連絡ができるような所に城があります。特に、南漢山城と先程の二聖山城というのは、二聖山城のほうでは木簡が出ていますが、烽火の木簡だろうと思うのですが、非常に近いところで烽火をやりとりしているわけです。そういう意味でいくと、鞠智城というのは朝鮮半島の城ほどの緊張状態の高まっているような感じはあまりしないというように思えます。

佐藤… ありがとうございます。続いて出宮さんお願いします。

出宮… 鞠智城の築城時期が確定できないというのは、非常に辛いことです。これは考古学の限界ですから、木簡で築城した記録でも出ない限りは。私の個人的なフォーメーションでいうと、やはり筑後平野といいますが、先程申し上げました、有明海北部にある支城網のバックグラウンドとして、その南の端に鞠智城は築城された。つまり肥後平野を掌握するというか、純軍事的というよりも後方支援的なものだったので

はないか。最初は軍事もありますが、逆に言うと、そういう純粋な軍事施設ではないので、民政的にも転用できます。その一方では、先程言いましたように、大宰府をフォーメーションとして両端の軍政施設へと転換していく。つまり多様性をもった施設だったものと思います。

平安時代の中頃まで、そういう幅広い使われ方をした。逆に言うと、神籠石の大半は、百済の城の評価をどうするかということです。要は「百済の城は負けた方の城」です。軍事施設とすれば、必ずしも機能的に十分な城ではありません。ということは百済の役で証明されているわけですから、きつい言葉で言うと、金食い虫の施設をいつまでも税金の対象として温存するということはあり得ないと思います。その転用できない軍事施設は速やかに退役することになります。それに対して、鞠智城はそういう多様性をもっていた、実践装備以外の民政的というか治政的な治所としての機能を当初から付与されていたので、平安時代の中頃まで、むしろそういう地域拠点、国府とは違う「国の出先」として機能し続けたという見方をしています。

佐藤.. ありがとうございます。確かに私も菊池川流域を押えるような機能は最初からあるだろうと最初から思っていました。が、わかりやすく説明していただいたと思います。私のように古代史を学んでいる者からすると「百済の城は負けた城」と言われると、『日本書紀』の大野城・基肆城は百済からの亡命將軍の指導で建てたという記載はどうなるのかなと思いますが、文献がごく一部のことしか語っていない、という場合は確かにあり、それをどう評価するかというのはこれからの課題かなと思いました。

では、向井さんお願いします。

向井.. そうですね、今の「百済の城ではない」という話と「百済の城は負けた城」だという話ですが、私も

そうだと思います。近江朝の政府もそうでし、負けた百済の人達も同じ物を造ろうとはしなかったと思います。そうなると、やはり隋、唐に対して高句麗が造っていたようなものを造ろうとしますが、では造れるのかというと、これまた話が違いますよね。技術的にはやはり先程出宮先生がおっしゃっていたように、地元でそういうバックボーンがないと駄目ですし、ですから理想ばかり語っていても駄目なのでしょうね。結局、私としてはプラン的には高句麗を意識しているが、最終的にはちゃんとしたもののは出来ていないと言った方がいいでしょう。

鞠智城に関してですが、大きく分けて三つの顔を持っていると思います。そういう意味では、佐藤先生をはじめ皆さん、いろいろな時期によって、先程酒寄先生も「違う側面がある」とおっしゃっていました。

私が一九九一年に書いた論文に書いていますが、鞠智城は、大宰府もしくは那津官家なつのみかの次の大野城、基肆城などの防衛ラインが破られた後の九州の第二拠点という部分で用意されていたようなイメージを持っています。なぜかという、結局、阿蘇山を抜けて大分の方にもつながりますし、有明海だとか菊池川流域を使って展開もできますし、それからもう一つ、筑肥山地といまして、ちょうど福岡県から熊本県に入るところというのは峠になっており、西南戦争の時にも戦っていますが、そういった部分を期待されたかなと思っています。

また、7世紀末については金田城との対比がひとつあると思います。対馬の金田城は最前線ですが、実をいうと奈良時代になると使っていません。ですから、対馬にいた防人は、金田城にはどうもいなかった

ようです。ではなぜこの一番奥まったところにある鞠智城がということですが、七〇〇年代に入りますと、今度は隼人の反乱がたびたび起こりますので、蝦夷の反乱ほどではないですが、隼人の反乱で、何回か征隼人軍が遠征されていますので、そういう部分での鞠智城のありかたというのがあるのかなと思います。それが終わった後というのは、やはり一旦廃城になっているようなイメージを最近持っています。というのが、鞠智城の報告書を読ませていただいて、この大規模な貯水池が維持されていません。それで、復活した鞠智城にはもう貯水池はなかった。といいますが、埋まってしまっている状態で。貯水池のない城というのはあり得ませんので、もう意味が変わってきているのかなというふうに思います。

九世紀の話が酒寄先生からありましたが、新羅の海賊の話なんかもありました。もう一つは、九世紀から一〇世紀にかけて九州は大飢饉になってしまいます。もう班田農民がいなくなってしまうような状態になって、大宰府は大開墾計画を立てるぐらいです。そういう暗い時代だったというのも、鞠智城を考えるうえで意味があるかなというふうに思っています。

佐藤…今回もやはり新しい見方で、高句麗など韓国や中国の城との比較をしていただきました。鞠智城を理解するという方向のシンポジウムを重ねることに、どんな像がまとまっていくかと思ったら、どんな話が広がっていったって、まだまだいろいろなことを検討しないといけないと感じているところです。これは学問的にはやむを得ないことかもしれません。と同時に、ある意味では楽しみが増えるといいでしょうか、鞠智城を軸にして、七世紀から九世紀代にかけての日本の古代史、あるいは東アジアの中の日本古代史という大きなテーマが、さらに研究が進めば浮き彫りになっていくだろうと思っています。

本日は、どうもありがとうございました。